養成講座にみる「省察」の意味
～ラウンドテーブルの実践から～

三輪 建二
お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授

はじめに

ラウンドテーブルは、6人程度のメンバーがグループをつくる語り手が、自らの実践を〈省察（せいさつ）〉しながら〈物語り〉、聴き手が報告者の語りを、その文脈に沿いながら〈聴き〉、意見交換をしあう学習方法である。物語ること、聴くこと、意見交換をすることをセットに約1時間半から2時間かけて行うことが多い。日本では、福井大学教職大学院において、教員である大学院生が、自らの教育実践を振り返りながら修士論文を作成する際のひとつの方法として行われており、早稲田大学文学学術院においても2006年度から、社会教育関係者、看護関係者、日本語ボランティア、自治体職員、学校教員などの他領域の参加者が、ラウンドテーブルに参加している。

09年9月5日に、一日をかけたラウンドテーブルが実施され、08年度に東京外国語大学多言語・多文化教育研究センターが主催した「多文化社会コーディネーター養成講座」の参加者を中心に大勢の参加があった。今回のラウンドテーブルのねらいは、それではどこにあると言えたのだろうか。ラウンドテーブルは、語り手にとって、聴き手にとって、また語り手と聴き手の双方にとってそれぞれに意味があるのではないかと考える。まず、語り手にとっての意味について考えてみることにしよう。

1　自分の実践を〈物語る〉意味

語り手にとっては、〈ロングスパン〉の実践を物語ることで、自らの実践を〈省察する（振り返る）〉機会となり、多忙の中で気づかなかった、自らのアイデンティティーを構成する〈実践知・暗黙知〉に意識的になって言葉に出していくことが挙げられる。ここで取り上げたいくつかの論点について、さらに検討してみることにしたい。

省察のための物語り

まず、〈自らの実践を省察するために物語る〉とは具体的には何を意味するのだろうか。

多言語・多文化教育の現場では、実践についてインフォーマルに語り合い、あるいはカンファレンスのような形で、事例報告とそれをめぐる検討会が開かれることがある。自らの実践について他者に聴いてもらい、よい点や改善点についてアドバイスをもらうのは、教科書やマニュアルを通して多言語・多文化教育実践を学ぶことよりも有益だと思うことがあるだろう。しかしながら、検討会の実態を見ると、ベテランから新人への指導であったり、代案の提示であったり、中には厳しく問い詰められる時間だったりと、報告者は二度と事例報告をしたくないという思いにとらわれてしまうようになりかねない。

そのような詰問の場になるのを回避するためには、語り手自身が自らの実践を「物語る」という語り方にし、その中で、語り手自身が、すでに身につけていた実践への構えや考え方に、言い換えれば自らの実践知、暗黙知、実践の中の知に気づいていき、それらを言葉にして明らかにしていくという省察的実践が行われることが求められるのではないだろうか。この点について、ドナルド・A・ショーンは次のように述べている。

> 通常、プロフェッショナルは自らの専門的な熟達を秘匿し、神秘なままにしておくことを期待されるのに対し、省察的な契約では、自分自身の「実践の中の知」を公開して省察し、クライアントと向き合うことのできる存在に身を置くことが期待される［ショーン 2007：316］。

多言語・多文化教育に携わる中で発揮している実践知、暗黙知は、通常は表に出ておらず、意識することがほとんどないままである。優れた実践をしている実践者の多くは、自らの実践知・暗黙知をそのまま秘匿した状態にしており、周囲

からも、「なんだかわからないけれどもあの人はすばらしい方だ」と神秘の眼差しを向けられることになる。しかしこうした状態を、ショーンはよしとしないのである。本当に優れた実践者とは、自らの実践知、暗黙知について秘匿せず、あえて意識的に公開し、言葉に出して物語ることのできる人だというのである。ラウンドテーブルは、語り手の実践知、暗黙知をあえて意識化し、公開し、明らかにする場となるのである。

ラウンドテーブルでファシリテーターを務める

ロングスパンで物語ること

それでは、なぜ、〈ロングスパン〉の実践報告なのだろうか。1回の講座やイベントについて語り、振り返るだけでは不十分なのだろうか。ラウンドテーブルで物語る実践の時間的な長さについては、1回の講座やイベントでもよいかもしれない。しかし、その実践を、成功したか成功しなかったか、効果があったかなかったかという観点から物語るのではなく、その講座やイベントに取り組んだ語り手自身の思いや姿勢についても物語るようになるためにも、語り手のアイデンティティーに連なる価値観、実践知・暗黙知が表面に出てくる必要があり、そのためには、実践をめぐって一定の時間の長さと幅が必要になってくると言える。ロングスパンとは、語り手の実践知・暗黙知がどのような過程の中で生まれ、育っていったのかを語り手本人が確認できるだけの時間の長さということになる。

2　実践を聴くという行為

ラウンドテーブルが省察的なラウンドテーブルになるためには、聴き手の側にも、一定の力量が問われることになる。実践に対する改善点の指摘といった、ショーンが批判する〈技術的合理性〉の視点からの聴き方ではなく、語り手が実践知や暗黙知を表現し、明確にできるようになるような、物語りの文脈に沿って聴く姿勢が意味をもってくる。

文脈に沿って聴く

それでは、ここで言う〈文脈に沿って聴く〉とはどのようなことを意味するのだろうか。それは、語り手が、自らの実践知・暗黙知を秘技のままにせずに意識化し、言葉に出していくプロセスをじゃませず、温かく見守っていくということを意味している。日常生活や実践の現場では、意識的に行うことが少ない、実践知・暗黙知の意識化と表現化の営みを、また試行錯誤の中で言葉が途切れてしまうこともあるような営みを、共感をもって励まし、見届けることであるといってもよい。

文脈に沿って聴くという営みは、多文化社会コーディネーター、多文化社会ファシリテーターとしての役割を考える際にも、必要な基本姿勢なのではないかという点についても考えてみたい。課題を提示しながら参加者を促すファシリテーターを〈積極的なファシリテーター〉とすると、聴くことを大事にするファシリテーターは〈消極的なファシリテーター〉と名付けることができる。多文化社会の中でのさまざまな課題に気づくことに熱心なファシリテーターは、積極的なファシリテーターということになるが、そこには落とし穴があることになる。落とし穴のひとつは、講座やイベントの中でファシリテーターが善意とはいえ、課題の伝達に熱心になり、参加者の意見を丹念に〈聴く〉ことが疎かになりかねないという点である。あるべき理想論の強調により、かえって参加者の心の微妙な動きに無関心になってしまう危険性が生じかねないのである［三輪 2009］。

哲学者の鷲田清一は『「聴く」ことの力』の中で、「哲学はこれまでしゃべりすぎてきた……」［鷲田 1999：13］と、モノローグ化しつつある哲学について反省的に述べている。鷲田はまた『「待つ」ということ』の中で、「聴くということがだれかの言葉を受けとめることであるとするならば、聴くというのは待つことである」［鷲田 2006：169］とも指摘している。この問題提起は、自分の存在とその意識について、世界の存在と構造について考えつづける哲学だけではなく、人間の行為を〈正の価値〉をもった行為と〈負の価値〉をもった行為に分類し、正の価値を追究してあるべき理想について語り、参加者を正しい価値へと善導していこうとする「教育」においても、したがって、多文化社会の実現という当為論を踏まえながら、社会のあり方を変えていかなければならないとする多言語・多文化教育論に対しても向けられるのではないかと思われる。〈あるべき論の実現も大事であるけれど、もう少し、参加者の声に耳を傾けてみよう〉という姿勢は、一見回り道であるように見えながら、実は、多言語・多文化社会を実現していくためにも大事な基本姿勢になるのではないだろうか。

ラウンドテーブルに初めて参加した参加者は、この〈聴く〉ことの難しさを体験することが多いようである。それは、物語りを聴こうとする際に、伝達したいという使命感を伴った実践知・暗黙知とのa 藤が生じるからだろう。〈聴く〉という営みは、実は、自らの中にある〈教えたい〉〈伝えたい〉〈指導したい〉というファシリテーターとしての実践知・暗黙知を意識化する営みということにもなるのである。

文脈に沿った〈問いかけ〉をする

もちろん、ラウンドテーブルは、ただひたすら聴き続け、聴き手としての問いを厳封することを命じる営みではない。一通り物語りを聴き終えた聴き手は、語り手に質問することができるが、その質問は、改善点の指摘や代替案の提示ではなく、語り手が自らの実践知・暗黙知に気づいていけるような〈問いかけ〉になるだろう。

その問いかけは、同時に、聴き手自らにも影響が出てくるものとなる。というのは、善意であったとしてもアドバイスすることが時として、語り手にとって、さらには外国籍の方々が自らの力で考え、エンパワーメントしていく機会を奪いかねないものである点に気づくことになるからである。

3　新たな公共性と学び合うコミュニティーの創造

今回のラウンドテーブルの参加者は、08 年度に多文化社会コーディネーター養成講座に参加していたという共通性があり、また、多文化社会の実現に向けて、それぞれの立場で活躍しているという点での共通性がある。とはいえ、その立場は、ボランティア、行政職員、研究者、実務家など多様な広がりをもっている。

ラウンドテーブルは、このように、自らの実践を、領域や立場の異なる聴き手にもわかるように物語るという営みとなっている。語り手は、現場では通用する言葉でも通じないという体験をしながら、相手にもわかる表現や説明を工夫する。聴き手の側も、実践の中から紡ぎ出された言葉の中から、自分にとっても共通な課題を見つけ出そうとする。こうした双方のやりとりは、見方を変えるならば、ラウンドテーブルが、異なる領域や立場の人々が共通の言語を持ち、課題を確認しあっていく新たな〈公的空間〉をつくり出していることを意味していると言えるのではないだろうか。

多言語・多文化社会の実現は、さまざまな障碍があるだけに、実現に向かって

しっかりと努力しなければならない大事なテーマである。参加者の多くは、手弁当で、その大切さを各地域で「伝えること」や「支援すること」に努力をしており、その地道な営みには頭が下がるばかりである。ただし、理想に向けて性急に活動すると、かえって、グループ内に指導者と従事者という権力構造をつくり、かえって望むべき理想の社会から離れた成果を生み出しかねない。望ましい社会を実現していくためにも、まずは参加者が実践をお互いに省察していく「省察的実践者」となり、省察を通して、本音が言い合える人間関係とグループを、〈学び合うコミュニティー〉を創造していく必要があるだろう。

おわりに

今回のラウンドテーブルでは、全員ではなかったものの多くの参加者に、自らの実践を物語る体験をしてもらった。「物語る体験は初めてで新鮮だった」「聴き手にきちんと伝わることの喜びがあった」とコメントした参加者が多かった。同時に、「聴くということがこれほどまでに難しいものなのか」と述べた参加者も少なくなかった。

新たな公共性を創造するラウンドテーブルは、多言語・多文化社会の実現を「遅らせる」ものではなく促進するものであり、異なる価値観を意識化し、表現し、お互いに本音をぶつけ合う、学び合うコミュニティーを創造し、広げるものとして、今後とも各団体の活動の中に位置づけてほしいと期待している。

三輪建二（みわ・けんじ）

専門は生涯学習論・社会教育学。子どもへの教育（ペダゴジー）をそのまま適用するのではない「おとなの学び（アンドラゴジー）」とは何かというテーマで、成人学習論を研究している。また、ショーンの省察的実践論を踏まえた現職者やボランティアの能力開発について研究すると同時に、ボランティア養成講座・専門職研修などの実践研究にかかわっている。ショーン『省察的実践とは何か』（鳳書房、2007 年）を監訳。

【参考文献】
ドナルド・A・ショーン著，柳沢昌一・三輪建二監訳，2007，『省察的実践とは何か―プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房．
三輪建二，2009，『おとなの学びを育む』鳳書房．
鷲田清一，1999，『「聴く」ことの力―臨床哲学試論』TBSブリタニカ．
鷲田清一，2006，『「待つ」ということ』角川書店．